

焼山山麓の湿原

焼山のふもと（海拔 800～1,100 メートル付近）には、大場谷地湿原や前谷地湿原などの湿原があります。ここには、ゼンテイカ、ヒメシャクナゲ、ツルコケモモ、タテヤマリンドウなどの湿地植物が豊富に生育しています。

このような高地の湿原では、湿度の高さと気温の低さが合わさって、枯れた植物が完全に腐敗しない環境がつくりだされます。枯れた植物は、腐るかわりに長年蓄積し、泥炭になります。

ほとんどの湿原は、沼が土をはじめとする堆積物で埋められことで形成されますが、東北地方の高地の湿原は、火山灰の蓄積によって形成されました。この種の湿原は、しばしばなだらかな山の斜面で発達します。これらの湿原の泥炭層の下には昔の噴火による火山灰が今でも残っています。

この強酸性の泥炭地の環境では、細菌の活動が制限され、分解を遅らせます。堅い外殻を持つ花粉粒はゆっくり腐敗します。長い歳月が経過した後も元のままの状態を維持しているこれらの花粉粒から、気候や植生の変化など、この地域の過去に関する貴重な情報を得ることができます。